日本人が古くから育んできた森とともに生きる知恵や技を次世代に伝えようと、今も現役で活躍する「森の名手・名人」をご紹介します。

使うことで命が吹き込まれる木漆工芸

木漆工芸職人
河野 清志さん

1978年に津具村（現・設楽町）に工房を開設。以降同町にて木漆工芸作品を製作し、個展も開催するなど精力的に活動。現在は設楽町議会議員として町の活性化に大きく貢献している。「第７回　聞き書き甲子園（平成20年度）」に登場。

▲漆を採取するときに使う道具

▲漆を塗る際に使用する道具

▲光沢のある木漆工芸品をつくるためには漆の「塗り」と「乾燥」を12回ほど繰り返す必要がある

愛知県北設楽郡設楽町。秋になると山々が紅葉で彩られるこの地に、木漆工芸職人の河野清志さんは居を構えています。顔料を混ぜない生漆を重ね塗りすることで木の持つ質感や個性を最大限まで引き出した作品を中心に、これまで生活空間に調和した木漆工芸品を数多く生み出してきました。かつては仲間の木工職人とともに漆畑をつくり、そこから採った自家製の漆で作品を仕上げたこともあるそうです。当時を河野さんは次のように振り返ります。

「20年以上前に、仲間と２００本の漆苗を近くの山に植えたんだ。それからは、まめに手入れをしながら大切に育てたよ。漆を実際に採ったのは今から７～８年前。やっぱり自らの手で育てた漆を使うときは、作品に対する思い入れが全然違った。僕が行っている木漆工芸は、素材となる木も漆もすべてが樹木からつくられる。改めて森や自然と向き合うことの大切さに気づかされた取組だった」

そんな河野さんが木漆工芸に魅了されたのは、今から43年前のこと。京都の印刷会社で働いていたときに、とある雑誌で木工芸の人間国宝 黒田辰秋氏の作品に衝撃を受けたことがきっかけでした。それから黒田氏に手紙を送り、木漆工芸への情熱が認められたことで晴れて弟子入り。河野さんの木漆工芸職人としての道がスタートしたのです。

「師匠からは、仕事の手伝いを通して多くのことを学ばせてもらった。中でも、師匠が生活している居住空間には著名な芸術家がつくった作品がごろごろ置いてあり、まさに

蕨の親草(左)と栗の実のいが(右)

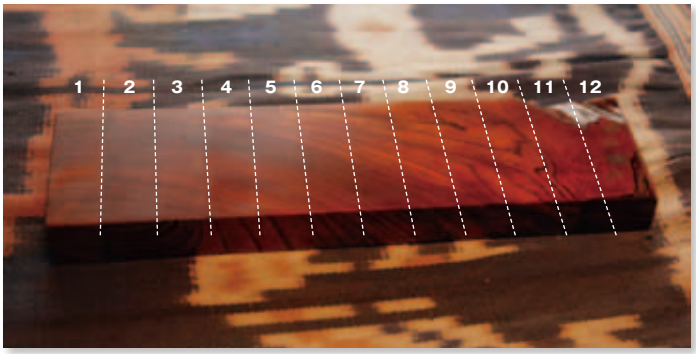
▲写真中央が「つぐっ子の森」。桜、山桜、栗の木、ヤマボウシ、コブシ、紫陽花などの多種多様な木々で彩られ、自生したタラの芽や蕨などの山菜も見られる

▲河野さんが仲間と植えた漆畑。同じ土地でも植えた位置が数m違うだけで育ち方がまったく異なるらしい

▲一本の大木からつくり上げた一対の椅子。背もたれに描かれている画も河野さんが描いた(寒山拾得図)

▲河野さん自家製の漆で仕上げた作品「拭漆栃の木花紋彫長櫃」

人間の都合ではなく素材の都合に合わせること。それが良い作品に仕上がるコツだね



▲写真の板は重ね塗りした漆を段階的に示したもの。右にいくに連れて光沢が増している様子が見てとれる(拭漆の工程)

本物に囲まれた生活を送っていたことが強く印象に残っている。でも一番の驚きは、食事の際に師匠はそうした作品のお皿をちゃんと食器として使っていることだった。どんなに有名な芸術家がつくった物でも、食器は食器として使われることでその存在価値が発揮される。ただの飾りにするのではなく、その作品が本来使用される目的通りに使われることで作品に命が吹き込まれることを師匠から教わったよ」

現在は、設楽町議会議員として活躍している河野さん。木漆工芸を通して長年樹木と触れ合ってきたからこそ、人工林に溢れている山々の現状に警鐘を鳴らします。

「設楽町もそうだけど、今の日本の山には杉や檜ばかりが植えられている。山には、涵養林としての側面や動植物との共存など数多くの役割があるのだから、落葉広葉樹をもっとたくさん植え、森林を再生していくことが町議会議員としての私の夢。その取組のモデルとなるのが、旧津具村(現・設楽町)が共生林の整備を目的に手掛けた〝つぐっ子の森〟だ。これからは、こうした森林を全国的に増やし、山の持つ機能をうまく活用することを意識しなければいけない。その先駆けとなるのが設楽町だったら嬉しいね」

木を見つめ、木と対話を重ねる木漆工芸職人だからこそ見えてきた今の森林問題。活躍の場を議会へ広げた今でも、樹木に対する熱い思いを胸にこれからも森林のあり方を問い続けていきます。

歴代「名手・名人」の聞き書き結果はコチラ
▼ http://www.foxfire-japan.com/